

庵野秀明

Hideaki Anno

☆
ロングインタビュー Part I

☆

欠落を埋めようとする作業が、僕は、
生きるってことだと思います。



☆

一九六〇年、山口県出身。「風の谷のナウシカ」で巨神兵の溶解シーンを作画、注目を集める。84年、ガイナックス設立に参加、同社の第一回作品「王立宇宙軍 オネアミスの翼」で作画監督を担当。その後、OVA「トップをねらえ」で初めて監督・脚本を手がける。TVシリーズでの監督作は「エヴァンゲリオン」の他、「ふしぎの海のナディア」。現在は、初の長編実写映画「ラブ・ポップ」(原作/村上龍)を準備中。

多くの謎を残したまま終了した
TV版エヴァンゲリオン。
ゲンドウは本当はシンジを愛してる？
使徒って何？など、疑問は尽きませんが、
やはりJとしてはカヲルとシンジの関係が
なぜあんなったの？
というのがまず知りたいこと。

広報担当の佐藤さんもまじえ、
式拾四話を中心に3時間に及んだ
庵野監督へのインタビューから、まずは、
カヲルとシンジの⑧エピソードや、
監督の表現者としてのこだわりを
語った部分を収録します。

(小説JUNE 96年8月号より再録)

◆ J U N E と か っ て 読 ま な い ん で す よ ◆

佐藤 たまたまとりあげていただいた号が出た次の週があれ（武拾四話）でしたからね。何か見てみようかなと思った人のハートをわし掴みにしたんじゃないかなと（笑）

あの回はマンガ家とか書き手の人の間でも電話やFAXが飛び交って、あそこまでやってくれるかって感じですよ。盛り上がってます。

監督は脚本も書かれてますけど、カラル君のなかなか嬉しいセリフはどうやって生まれたものでしょう？

庵野 うーん、あれどうやって書いたかなあ。けっこう自然に出たな。

自然に出たんですか（笑）何かリサーチなさったとかは。

庵野 ないです。JUNEとかって読まないんですよ。

じゃあ逆に自分が口説く時、あるいは口説かれる時、ああいう感じで言われると嬉しいかなとか。「君の心はガラスのように」とか言っちゃったり言われちゃったり、何か、実際あったということはないんですか？

庵野 いやあ、ないですね。

お風呂場で手を握られてしまったとか。

庵野 そういうのは男はないですよ。女は、この年だと多少の経験はありますから。

女の子と風呂に入るのはいいよね、と「ニュータイプ」でおっしゃってましたけど。

佐藤 はっはっは（笑）

庵野 うん、いいと思いますよ。

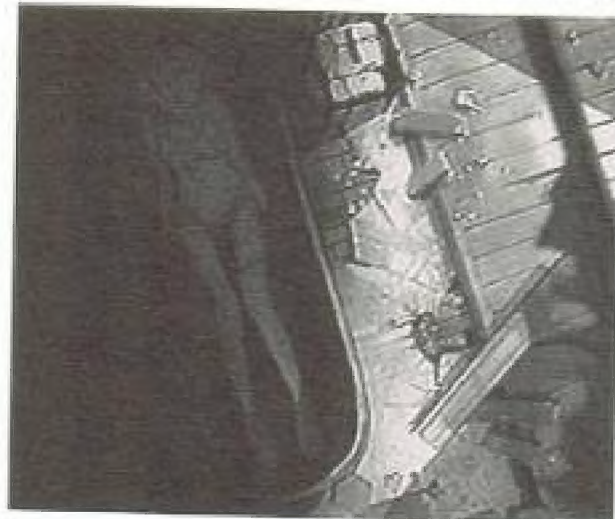
そっけないお返事（笑）あれ、部屋の中とかではなくて最初からお風呂場に？

庵野 中学生ぐらいの時だったら、友達と銭湯によく行ったりしてるでしょ。学校帰りとかに。あと、海へ遊びに行ったあとそのまま行くとか。田舎のほうは銭湯多いんで。男の社交場みたいな感じ。まあ、一緒に背中洗いあうとか、そういうスキンシップな部分というのはないんですけどね。とりあえずみんなで一緒に行くような、ダーってそこで遊んで帰るみたいところです。もうちょ



▶キャラがこれほどお風呂に入るアニメも珍しいかも。ミサトの風呂好きはもろん、10話では温泉も登場

◀24話ではネルフ銭湯のほかに、失脚したアスカが廃墟のひからびたバスタフに入っている、という場面も。風呂＝子高という監督の言葉に納得、の演出



つと健康的なイメージだったんですけど (笑)

——「温泉ペンギン」が出てますし、ミサトもお風呂が好きなんでしたっけ？ お風呂という
か水の中は気持ちがいいという感じで。

庵野 そうですね。胎内回帰のイメージもあるんですけど。風呂の中というのは。

——そういう意味で言うとアニメで疲れて帰ってやっぱりお風呂に入ると。

庵野 いや、風呂はいいと思いますよ (笑)

——で、富士山とネルフのマークが交互に出るとというのが、やっぱり楽しかったんですけど。
桶に全部ネルフマークがついているのも。

庵野 ええ。それも逆さまについてますよね。とにかく疲れてたんで、遊びがほしかったんですよ。
あれはなかなかいいなあと。

佐藤 風呂に入りたいっていう気持ちが集中してたのかもしれないね (笑)

——ネルフのお風呂のスタッフってどういう人たちなんだろう。制服があるんでしょうか。動力
源は？ (笑)

庵野 やっぱ原子力ですよ (笑) 原子力の残り湯だと思いますよ。2次冷却水あたりで充分だと思
いますから。

——ビデオ版あのへんがパワーアップされるというのはないですか？

庵野 シーンをちょっと足そうと思いますよ。シンジとカヲル君の話に集約しとけばいいやという
感じでやっただんですけど、もうちょっと余裕ができるんだったら、カヲル君とミサトだけは会わせ
ないといかんと。レイとチラツと挨拶しただけで、あとはシンジとしか話をしてないんですよ。
実は。他の人に会う必要ないんですけど、ミサトだけはちょっと会わせとかないとまずいかなあと。
というシーンになるかちょっと思いつかないんですが。

——ああいうJUNE的というか友情を越えたような演出っていうのは、自然にああいう感じ
に出てきたって、さっきおっしゃってましたが。

◆とにかく疲れたんで、遊びがほしかった◆



▲そしてケロリン…じゃなかったネルフ湯桶



▲ウツサのネルフ温泉マーク

◆別にシンジ君がそこで肉欲に走るわけでは（笑）◆

庵野 たぶん知る限りの、そのへんのやつを入れたんですよ。もしくは僕自身の持つてるそういう部分っていうのがその程度のもんなのかなって。

— その程度でもかなりなもの（笑）

庵野 やっぱ、スタッフにおかしいって言われましたけどね（笑）

— 頬を赤らめちゃったりするというのは。やっぱ、好意示された嬉しさですか。

庵野 そうですね。別にシンジ君がそこで肉欲に走るわけではないですから（笑）

— そういう意味では向田邦子さんも小説で書いていましたけど、日本のサラリーマンとか男同士というのは外国で言えばホモと同じだ。別に肉体関係がなくても。だって会社で一緒に仕事しているほうが家に帰るより楽しいから残業して、休日も出たりしている。で、実は監督もGAINAXにいるほうが、男というほうが楽しいということはないですか？（笑）

庵野 うーん、楽しい…そういうふうにはならないですね。まあ、楽にはなりますけど。

— 女の人というほうが疲れる？

庵野 気を使いますね。それは当然。

— サービスしなきゃいけない。

庵野 サービスとかそういうわけじゃなくて、やっぱり女性には気を使うと思いますね。気を使わなくなるまでに結構時間がかかると思いますけど。

— 最初からああいう予定だったんですか。あの回にカヲル君が最後のシ者として。

庵野 オープニングにもニコマだけ出てますけど。

— オープニングを設定した時点ではあの絵しかなかったんですか。

庵野 まあ、貞本（義行）のほうのラフの絵しかまだ上がってなかったんで。ちょっと変わっちゃってますけど、本編の絵とは。

— でも役割的には同じ？

庵野 そうですね。最後の使徒は人と同じ形で少年にしようと思ってたんで。

でも活カラルって名前たって、女の子でもいいわけじゃないですか。

庵野 でもあれは少年ですよ。女性っていう感覚がまるでないですもんね。シンジともう一人のシンジですから。理想のシンジが現れるんで、それは女性ではダメです。

― ああ、なるほどね。

庵野 シンジが持っているコンプレックスを全部クリアしているキャラクターですから。まあ、そのへんはちよつと描写が僕の力不足でストレートに出てないですけど。誰からも好かれるキャラクターで。初期の段階では猫を連れた美少年だったんですよ。一番最初のプロットのタイトルは「猫と転校生」。猫を連れた転校生が中学校にきて云々という話だったんですけどね。やっていくうちにもう24話では学校どころではなくなくなってしまったので。あれが1話から16話くらいまでのところにくるエピソードだったら、まだよかったんですけどね。

― たいてい脚本に庵野さんともうひと方クレジットされていますが、お二人の関係はどういう感じなんですか。

庵野 一緒に話してからプロットをやってもらって、脚本という形になったのを僕がもう一回、要するにアニメーション用にちよつと直すという。まあ、その時点で脚本書き送りになっちゃったんで、その前の段階の打ち合わせの時に考えていたストーリーとかドラマとキャラクターが、その脚本が上がってくる時にはつじつまが合わなくなっているというのもあるんですよ。そういうのを合わせて直していかなくやいけないので。僕が統一してやりますから、統一はされるんですけど。ドラマ部分のお手伝いとかですよ。

― 24話はどなたが？

庵野 あれは薩川^{さつかわ}（昭夫）さんという方が。薩川さんのほうが、こういう言い方はまずいんですけど、ホモッ気はばっちりっス（笑）

― 男の友情に厚い。

庵野 僕よりはそうかな？（笑）

◆カヲルはシンジが持っているコンプレックスを全部クリアしている◆

●薩川昭夫：脚本家。映画「屋根裏の散歩」三押繪と旅する男（ともに原作は江戸川乱歩）の脚本で93年にデビュー。庵野監督とは「オディア」の編集を担当したのがきっかけで出会い、「エヴァ」では武拾遺話をはじめ全12本の脚本を執筆しています。最新作は秋に公開予定の「D坂殺人事件」（江戸川乱歩原作／実相寺昭雄監督）

●薩川昭夫脚本リスト：第3話「鳴らない電話」第4話「雨、逃げだした後」第5話「レイ、心のむこうに」第6話「決戦、第3新東京市」第9話「疑問、心、重ねて」第10話「マグマダイバー」第12話「奇跡の価値は」第13話「使徒、侵入」第15話「嘘と沈黙」第19話「男の戦い」第21話「ネルフ誕生」第24話「最後のシンジ」「シト新生」DEATH編

◆薩川さんのほうが、ホモっ気はばっちりっス（笑）◆

薩川さんが暴走しそつになったのを庵野監督が止めた？

庵野 いや、そんなことはないです。薩川さんの雰囲気って、脚本に残ってます。薩川さんの脚本のオリジナルのほうがもつとそういう意味ではJUNEっぽかったです。

例えば？

庵野 僕は風呂にしちやっただんですけど。オリジナルの脚本は川で裸で二人で泳いでたんですよ

（笑）

昼間ですか？

庵野 わかんない、夜だったかもしれない。

夜、月の光を浴びながら？

庵野 わかんないっス。川で二人で泳ぐという美しい絵があつたんですよ。さすがにこれは僕の許容範囲を越えるっていう（笑）

エンディングの『FLY ME TO THE MOON』の男二人バージョン（笑）

庵野 演出家も拒絶してしまつて、「さすがにこれはできん」（笑）
そついったシーンは他には？

佐藤 あれ、チェロがあるじゃないですか。一緒に……「僕がピアノを弾くんで、君がチェロを弾きたまえよ」って。夕方の教室でポロロンッって先にカヲル君が弾いてて、そつとシンジ君が覗くと「君も何かできるの」「今度一緒にやろうよ」みたいな感じで。「ちよつと僕が歌をうたうから」

って。

庵野 そうだそうだ。人のいなくなった、疎開した後の音楽室でやるっていうのがあつたんですよ。

カヲル君と音楽のイメージとの結び付きというのは？

庵野 言葉じゃないと思うんですよ。コミュニケーションとして、最初に来た時にシンジもチェロをやつて、一応音楽をやつてたんですよ。それともあれは治療の一種か

何か？

庵野 いや、わかんないっす。あれは脚本家の人のアイディアなんです。まあ、キャラクターがチエロって感じがするっていうそれだけですけど。

——その最初の脚本は何か形になってたりしないんですか。

庵野 なってないですね。シナリオまでです。

——JUNEの読者がいかに喜ぶことか。やっぱりという(笑)だってせっかくおいしいキャラが出て来たと思ったら使徒だとはいえ一回でいなくなってしまうというのはあまりにも。おかげでコミケは楽しみですけど。

佐藤 この間までは「トウジ攻シンジ受」みたいなものばかりやったっていう噂なんですけれど(笑)いまは違うねんという話を聞いて。

庵野 トウジ君いなくなつて、みんなカヲル君になつてしまったみたいです。

——JUNEはやっぱ一緒にピアノとチェロですよ。川のシーンも捨て難い。でもお風呂のシーンのほうがHかもしれない。野外の川で水遊びって健康的ですね。

佐藤 しかし、どんなんか知らないけど、夜、「月の光だけで、誰も見てないよ」とか言つて一緒に裸で川に入るほうが俺はちよつとアレやと思うけどな(笑)風呂で二人裸でおるのは普通やからね(笑)

庵野 ね、全裸でね。

佐藤 「君も一緒に泳ごうよ」とか「誰か見るかもしれないよ」とか、それもリバー・フェニックスの世界に入つてると俺は思うけどな(笑)

——そうですねえ。でも女の子にとつてはどっちだろう。お風呂場で二人っきりのほうが、結果的にはとてもJUNE度が高かったというか。

庵野 まあ、男風呂っていうのはまず覗けない世界ですから。禁断の領域っていう雰囲気があるのかもしれない。でも、どう見ても銭湯っすけどね(笑)

佐藤 あれがいいんちやいます? リアルで。

◆一緒に裸で川に入るほうが俺はちよつとアレやと思うけどな(笑)◆

●薩川昭夫さんによる、「最後のシ者」準備稿(初稿・二稿)は、別冊JUNE 96年9月号(創刊号)に収録されています。イラストは野火ノビタ先生

◆うちの番組見たこともないのによくできたなあ◆

—— 薩川さんは他の作品は？

佐藤 この間、実相寺（昭雄）先生が撮った実写の『屋根裏の散歩者』とか。嶋田久作の。

—— なるほど。あれもJUNE度がちよつとあつてうちで紹介したんです。そうか。だんだんつじつまがあつてきましたね（笑）

庵野 JUNEな脚本家だったんっす。

—— 「シ者」で「渚」という文字面のシャレは？

庵野 あれは薩川さんです。一応、水というか海というか、水に関係するのにしてくれって。カヲルというのも薩川さんで。

—— 使徒っていうのは使者って言い換えてもいいわけですね。

庵野 うーん、まあ、意味合的にはそうですね。

—— 「シ者」っていうのは死んでる者っていうシャレもあるんですか？

庵野 ええ、掛けことばです。

—— それでシンジのほうが生きる者でカヲル君が死者であるという。

庵野 ええ。漢字にしたりカタカナにしたりしているいろいろ掛けられるんです。

—— カヲル君を演じた声優さんの石田彰さんも良かったですよね。

庵野 石田くん良かったですよね。

—— 雰囲気あつてね。石田さんには何か、こういうふうにとか指示は出したんですか。

庵野 と言ったつけ。線を細く、優しくとかそれくらいですね。一回、テストの時はちよつとイメージ違つたんです。2回目の、こういうふうにしてくれって言った後はもうそのままOKです。本番はすごく良かったです。絵も何にもなくて、うちの番組見たこともないのによくできたなあつて。

—— 監督は、少年にこだわっているのがありますか。

庵野 あんまりないです。



◀「屋根裏の散歩者」(脚本／薩川昭夫。明智小五郎(左)を嶋田久作さんが怪演♥)

●実相寺昭雄：映画監督、TVシリーズの「ウルトラマン」「ウルトラセブン」を手がけたのち、映画に進出「帝都物語」などの作品がある。傾いた構図や画面を歪めて不安感をかきたてる手法など、独自の映像センスで知られる。

——こういう少年だったら格好よかったのにみたいな。

庵野 いや、カヲル君はよくわかんなくなってきたので、失敗したかなって気がなきにしもあらずです。ただのおかしい奴です（笑）イメージがちよつと違うんです。まあ、キャラクターとしては石田くんの声がすごく良かったので、ただ自分が考えてたのとはちよつと足りないかなともっと誰からも愛される、すごくいい人にしたかったんですよ。もうシンジが見たらコンプレックスを持つしかないみたいな。

——最初は猫を連れてたということですけど、どうしてそうしたんですか。

庵野 なんか変でいいじゃないですか。ウエットな感じで。転校生でがらがらつて戸を開けて、猫を抱いてたら、いい絵だと思えますよ。猫を横に歩かせると作画大変なんで、ここに抱えてると

（笑）

——何で猫をやめたんですか。

庵野 面倒くさいから（笑）

——じゃあ前の場合だったら、猫も一緒にEVAで潰すつもりだったんですか。それとも、猫だけは生き残るとか、形見として。

庵野 いや。イメージとしては……あとはアイデアとしては猫のほうオリジナルの使徒で、人間のほうが傀儡かいらいつていうか。どっちが本物かわからないつていう。まあ、それもよくある話なので、いいやつて。（編注ⅡSF映画の『地球の静止する日』など）

庵野 正直に言うと、自分が考えてた最終回つて、もうネタは使っちゃったんですよ。

——いままでの中で？

庵野 ええ。25、26話つて、あれ最終回なんです。本当にそうするつもりだったんです。

——えっ!? そうですか。

庵野 1本、量が増えちゃったんです。25話で大体の謎にカタがついたら、あとはシンジさえなん

◆カヲル君は失敗しちゃったかなって気がなきにしもあらずです◆

◆ 口 唇 期 の 良 い 母 と 悪 い 母 ◆

とかすればいいやと。

それでいろんな考え方がありますよというのを見せて。
庵野 ヴィジュアルの見せ方とかセリフの言い回しとか、方法論は違うんですが、根底に流れてい

る、言いたいことっていうのは同じなんです。

— そうなんですか。僕はまた、最後のほうで時間がつまってきたので、本来の形を不本意な形で出すよりは転んでもただでは起きないという感じで（笑）転んだだけでもちゃんと芸を見せ

てということかなあと思つてたんですけど。

庵野 いや、それもありますけど。でもそれはあくまで方法論のところ。劇中劇というアイディアと舞台みたいにしてしまうのはギリギリで思いついたんですが、シンジ君が他人の、表面だけじゃなくって過去を見てく、という……どんな人間でも汚い部分つてあるわけじゃないですか。でも人と付きあう時には、特にその人が嫌われたくないと思つた瞬間に、パツとそこをできるだけ見せないようにすると思うんですよ。少しでもいいところを見せようと。そういうところだけ見て判断するわけじゃなくって、その人が持つてるネガティブな部分まで見た時に、果たしてその人間をひとつの個として見られるかという。

— まるごと受け入れることができるか、みたいな。

庵野 そうなんです。それはフロイト博士が言っている口唇期の良い母と悪い母という理屈なんですけど。要するに母親というのは自分を無条件で守ってくれると同時に自分を束縛しているという悪い部分もあるもんだと。あと母親は毎日機嫌がいいわけではないですよ。例えば自分が泣いた時には、機嫌がよければいい子いい子してくれて、泣いちゃいけませんよみたいなこと言うんだけど、イライラしていて機嫌が悪い時は怒鳴ったりもしますよね。子供から見たら同じ人物に見えないんですよ。だからいい母親と悪い母親というのが存在していて、それがひとつの人格の中に内包されているというところを認めて初めて他人つてというのが見えるんです。それをやるつもりだったんで。やるアイディアというのは全部出せたんですよ。



◀口元を隠すのは、ミステリアスな効果＋「セル枚数が少なくてすむ、というの」

——本来の予定は演劇的なものではなかった？

庵野 もうちょつとドラマの中に入れ込んで。まだ25話のほうはそこまでやる予定でやってたんですけどね。シンジが見たミサトとアスカというのをやれば、とりあえずOK。で、アスカが25話で立ち直る予定だったんですけど。だめですね、むずかしいですね。

——お父さんのゲンドウに関しては？

庵野 親父は、まあ、最終回ですね。友達とか他人の部分を25話でやって、血縁のところは最終回でやるとか。

——別に殺したりはしない？（笑）

庵野 わかんないっす。まあ、一回ネタを使っちゃったんできついですよ。同じのをもう一回やるかどうかは、同じネタを賞味期限切れたから使うというのもあるんですけど、賞味期限切れなし、少なくともLDはカップリングで出るんで、ダブるのはできるだけ避けたいなど。

——台本を画面に映すことは最初から予定されていたわけじゃないですよ？

庵野 いや、ありましたよ。劇中劇の、最後は台本にしようって。要するにTVから出ている虚構というか。

——そうだったんですか……。では、庵野さん自身が実写で出ちゃうみたいなのは？

庵野 やろうと思ったんですけどね。ダメだって言われまして。いや、マジに半パートそれをやるうって言ってたんですけどね。局のほうから、それはやめてくれって言われまして。

——ヴィジュアルの部分のクオリティがもう22話以降、維持できないというのが12月の前の段階でもわかってたんですよ。もう3カ月くらい前に、これから逆算スケジュールを切っていくと「あつもうダメだ」と。その場合に選択肢がいくつかありますよね。そのうちで一番きついのを選んだと。

——これだけ話題になった作品って、いままでないんじゃないでしょうか。

庵野 まあ、普通の終わり方をしなくて今は良かったと思いますけどね。

——みんなに考えさせるものになった。

◆一回ネタを使っちゃったんできついですよ◆

◆最後は裏切ろうと思っただけです◆

庵野 まあ、予定調和だけは避けたかったんで、最後は裏切ろうと思ってたんです。

それで渡辺多恵子さんが裏切られたと怒って（笑）渡辺さんもすごくハマってまして、繰り返し見て、そのあと次の週はこうなるだろうという予測を立ててと。で、一時シンクロ率が400%まであがって（笑）

佐藤 とけちやいますね。

ところが彼女はアスカに一番感情移入して見ていたそう。だからアスカがおかしくなっていくのがすごく納得がいなくて、20話以降自分で描き直したいくらいだと。それで最後の2話で切れて、もうすごい怒り狂ってまして（笑）監督には絶対落とし前をつけてくれと伝えてくれと頼まれて来ました（笑）

庵野 ああ、私、渡辺さんのファンなんです。

そうなんですってね。とにかく渡辺さんはすごくハマってて、最終回も友達と大勢で見たそうですよ。その分だけ憎しみがあつて（笑）

佐藤 それは迂闊（うかつ）でしたね、渡辺さんともあろうお方が（笑）
逆にシンクロしていたために離れられなかったというが、客観的になれなかったというが。

庵野 そうですね。あれだけ冷静に物事を見る人が、それはちよつと意外でした。ああ、じゃあ渡辺さん脚本やらないかな。

———すごい読み込んでらっしゃるから。

庵野 本当ですか。じゃあ、脚本、最初から頼んでみようかな。

佐藤 納得いかないなら、あなたがやってくさって（笑）

庵野 まあ、渡辺さんは渡辺さんで、たぶん自分が思い描く最高のラストというのが出てくるはずなんです。あの人は……マンガを読んで一度だけ本人にお会いしたことがあるんですけど、お会いして話をした時に、あつ僕より数段、ストーリーテリングとかドラマの構成力とかが……3つぐらいステージが上の人だなと（笑）全然かなわない（笑）だから、たぶん渡辺さんが考えたほうが、い

イラストになる（笑） 僕がやるよりはいいと思いますよ。これは正直そう思います。僕より多分うまく構成して話を作れると思うんですよ。でも、そういうふうに分で組み立てたものは、自分のものでしかないということですよ。

それはきつと監督のものとは違いますよね。

庵野 違いますね。そこが問題なんです。怒っている人も多分自分のやつがあつたと思うんですけど。

— そういう意味でいうと、みんな感情移入して見るから、虚構であることを忘れたいという。もちろん知っているんだけど、できるだけ一体化したいという時に、これは夢なんだと言われちゃうとはぐらかされちゃった感じを受けたりするのかなと思うんですけど。

庵野 まあ、物足りなさは残ると思います。でも、… 完結すること自体がすべてのエンドマークと束しなくても、そのキャラクターだけなんとかなればいいというものもあるわけですよ。物語が収う固定されたものに捕らわれて云々というのも、どうかと思うんですけど。

— ああいう形で決着がついたように見えないというのは、逃げたということになるんじゃないかと。逃げちゃだめだと言ったのに逃げたじゃないかというふうに思われちゃっているかもしれないですね。

庵野 なんで「逃げちゃだめだ」をテーマということにするんでしょうね。

えっ!? … そうですね（笑） まあ、シンジ君がいつも正しいとは限りませんからね。

ええ。なんで主人公が言つて、やることがみんな正しいと思うんでしょう。

庵野 ええ。テーマはそうですよ。逃げてでもいいんですよ。

ええ。テーマはそうですよ。逃げてでもいいんですよ。

庵野 共感する人はそれでいいんですよ。逃げちゃだめだと言つてた人が逃げたということですね。

◆… 完結すること自体がすべてのエンドマークというもんじゃない ◆

◆人を傷つけずに自分が前に進むことはできない◆

を糾弾するのもOKなんです。でも、それを正しいと思い込むというのはありますよね。僕がやつてることがみんな正しいのかと言ったら、そんなこと全然ないですよ。25、26話の中でも「逃げ出したければ逃けてもいい」ってセリフが入ってますからね。まあ、逃げ出すことによって得るものもあるし失うものもあるわけですからね。人間生きている以上どっちもあるんですよ。何にもしなければどっちもないですけど。それは死んでるのも同じです。そういう人がいっぱいいるみたいですけど。まあ、得るものがある以上、失うものも必ずあるんですよ。人を傷つけずに自分が前に進むことはできないですからね。それを恐れてしまったら何もできないわけですから。まあ、逃げちゃだめだというのが、OKというものでもないんです。逃げちゃだめだというのは、逃げたことによって、すっげえ嫌な目にあつたからそう思ってたただけで。逃げたことによって、「あつすっげえ楽になった」と思ったらそれでいいと思うんですよ。

アダルト・チルドレンっていうのは、最近僕がよく耳にする言葉ですけど、それは、ダメな両親のもとで育って、その両親に引きずられたまま大人になってしまつて、親とか男とかに依存しないと生きていけなくなつてしまつた人たちの総称らしいんですけど。それを見ても、親から逃げ出すというか、親元を離れることによって解放される気分というのは来るんですよ。すっごい過保護な親で、「××ちゃん××ちゃん、東京に行ったら悪魔がいるから、そんなところに行っちゃいけないよ」って自分の檻の中から絶対出さない母親っているわけじゃないですか。いつまで経つても、それを良しとしてその場にいたがる人はそれでいいんですけど、それがすくく窮屈でいやな気分になつて人っているわけじゃないですか。拘束されっぱなしのそんなところから逃げ出して、東京でまたフリーターでもやつてその目暮らししたほうがましだって人がいるわけでしょう。そういう人はそこから逃げ出してるわけですよ。田舎からの脱出ですよ。

逃げると言つか、脱出と言つかで全然イメージは違いますよね。

庵野 逃げ出すっていうことは同じですよ。逃げ出すことによって自分が解放されるんだつたらそれはOKなんです。全然OKなんです。むしろ逃げ出したほうがいいんじゃないかと僕は思

いますから。まあ、シンジはいま、20話を見ればエヴァンゲリオンにとり憑かれてますよね。それにしがみつくことによって、他の人から認められて自分の存在意義もあり、になってますよね。そこから解放されればもう別の、少なくとも次の段階が待ってる、そういうもんだと思いますよ。ただ「白」への退行は袋小路への無限ループでしかないと思います。それはそれで行き着く先についてるのはそういうもんだと思いますので。袋小路に入ってしまったら、そこを蹴破るしかない。蹴破った後は次の袋小路が待ってるだけなんですけど、でも入ってそうやって生きていくしかないから、それでもしょうがないかなと思いますけど。

シンジの場合はエヴァに乗るしかないという。ミサトたちとの繋がりも、仕事仲間になることじゃないとダメって。そういう意味で言うと、庵野さんは「エヴァ」を描かなければGAA-NAXにはいられないとか(笑)描くことが自分の一番得意なジャンルだし。

庵野 もうちょっと大きな、アニメーションとか、そういうもんなんですよ。最近、「エヴァ」が終わってからですね、ふと古本屋に行ったら寺山修司の「演劇論集」がありました。今まで寺山修司って人に興味なかったんですよ。全然、何も見てないし、何も読んでないし、名前だけしか知らない。何か演劇やってた人で、押井守さんの元ネタの人だとかその程度の知識しかなかったんですよ。それでちょっと買つて読んだらですね。理論はすごく面白いですよ。ああ、こりゃあ70年代の人はこっちに行くかというのわかるんですけど。その本の中に、寺山さんが演劇をやるのは演劇という媒体をもって社会と接することができ、要するに自分は演劇というものを介しないと社会というものに接することができないんだ、とか書いてあつて。ああ、それはわかります。要するに僕はアニメーションというものを通さないと社会と接することができない。まあ、それだけのことで。アニメに依存しないと自分の演技をできないってことです。他の人とも話をするこ

◆僕はアニメーションというものを通さないと社会と接することができない◆

いです。ものすごく大きな穴です。

——その穴落を埋めるために作る？

庵野 そうです。それが表現です。すべての表現はそれです。だからデカダンスではありえないわけです。アニメーションというのはね。いや、すべての表現は僕はそうだと思います。声優さんが演技するのも、アニメーターが絵を描くのも、僕がこういう作業するのもすべてそうだと思いますけどね。

——じゃあ「補完計画」というのも、やっぱりその穴落を埋めるためなんですか。

庵野 埋めようとする作業が僕は生きるってことだと思っています。

——なるほど。

庵野 ただそれは、比較的に見れば、他の人よりは僕の穴はかなり大きいって気がします。だからここまでやらないと、まだ満足しないって感じなんです。それでも満足しないですね。

(1996年4月25日、ガイナックスにて)

【こぼれエピソード】

- ネルフマークの案っぱはイチヂクだった。
- 「残酷な天使のテーゼ」の歌詞“少年よ神話になれ”は、最初の案では“凶器になれ”だった。
- 24話で使われてたベートーベンの第9は、歌詞も変チェック。
- 第1話の使徒・サキエルは、あさりよしとおさんの「ワッハマン」に登場するイシュタルが原形。
- ベジタリアンの庵野監督、動物クッキーも食べられないそう。

庵野秀明

Hideaki Anno

☆
ロングインタビュー Part II
☆

僕は、人間は不安なほうが自然だと思うんです。
幸せってというのは錯覚でしかない。



☆
スペシャルゲスト

野火ノビタ

小J8月号に続く、

庵野監督の最新インタビュー。

当初、前回の未収録部分から掲載する

予定でしたが、

「この間はダメ人間状態だったので」(笑)
立ち直ってきた今の心境を聞いてほしい、
との申し出をいただき、

急ぎよ再インタビューが実現。

ゲストに野火ノビタ先生を迎え、

(庵野監督は野火先生のエヴァ本を

読んでいるそう)、監督のバックボーンから

放映終了直後に陥った不安までを、

うかがいました。

(別冊JUNE 96年11月号より再録)

◆庵野さんと私個人が、視聴者と送り手としてファイトしてたんですね◆

庵野 「野火さんに」唐沢さんの本に書いてましたよね。正直、少し泣きました。あの文章はありがたかったです。

野火 「エヴァンゲリオン」は、私も何度も泣かされました。アニメで声を上げて肩を震わせて泣いたのは、本当に初めてです。一番最初にガンと思っただのは14話なんです。総集編パートもうまく作ってあるなって感じなんですけど、CM明けてから、いきなりレイちゃんの独白がバーツと来るところ。うわああああ号泣って感じ（笑）その時に初めてビーンツと来たというか。それまでは面白いアニメとしか思ってたんですけど、これは私自身の問題でもあると。

以前に野火さんが言ってたんですけど、見てる側と作る側の戦いみたいなのところもあると。真剣に見ざるをえないというところで、実は自分も参加してる。

野火 非常に真剣勝負していたつもりだったんです。庵野さんと私個人が、視聴者と送り手としてファイトしてたんですね。熱く燃え上がって（笑）相手も傷ついてるが俺も傷ついてるって感じだったんですね、お互い打ってはならない秘蔵パンチを繰り出しつつ。でも、試合終了5分前ってところで闘技場を降りられてしまった気がして。「ああっ、ちくしょう。俺はまだ戦えるのにつ！」って（笑）

庵野 そういう意味では、スタッフとも真剣勝負ですよ。一番最初の敵。まあ、喧嘩もせず面白いものはできないですよ。うちのスタッフはきついんです。金のつながりじゃないんですよ。つまんなくなればやめるっていう。

野火さんは、14話以前はファイトしてたんですか？ 六話で「どんな顔をしていいのかわからない」ってレイが言うところとか。

野火 あれも良かったんですけど、まだドラマツルギーだけっていうか。その後ろにあるものが、14話で見えたんだと思うんですね。前半部分っていうのは、ドラマツルギーの奥にあるものを、ドラマに仕立て上げるっていうのがうまかったと思うんです。でも私が本当に感動した



4 「エヴァンゲリオン」のキャラ、そして庵野監督の共感も、分岐研究の名著『ひき裂かれた自己』に託して語る。野火さんの批評本「大人は判ってくれない」（ちなみにこのタイトルは、ムーンライダーズの同名曲から）冒頭で監督が話題にした。唐沢さんの本「エヴァンゲリオン」の「サード・ミレニアム」のこと。なお、庵野さんは唐沢先生とは別の友に収録された文章に加筆修正したもの。

のは、あの謎解きの面白さとかではなくてですね、あの……本当に言いたいものだったんです。

庵野 それは多分……僕、中学の時から少女マンガのファンでして。今でいうガールフレンドで、リツコさんって言う人なんですけどね（笑）。あの子と知り合わなければ、いまの僕はいないっていうくらい影響を受けたんです。SFと少女マンガに引き込まれましたから。「別冊マザーガレット」を読んで、くらくらもちふさこさんとか、市川ジュンさんや和国慎二さんとか。ギャグを描かない頃の亜月裕さんとか岩館真理子さんも。その後「りぼん」に行って太刀掛秀子さん、高橋ゆかりさんとかですね。あと、大島弓子さんの短編とか渡辺多恵子さんの「ファミリー」。「花ゆめ」「ララ」「別コミ」、一時期「ちやお」まで行きましたから（笑）。でも、講談社系は読まなかったですね。とにかく少年マンガって読んでてつまらなかったんです。永井豪さんの「デビルマン」とかは読んでたんですけど。あと「アストロ球団」は面白かったです。僕の人生、「アストロ球団」ですから。一試合、完全燃焼なんです。その他の熱血マンガは、わかつちやうから。先の展開が。

——ああ、少女マンガってわからないですものね。

庵野 何で好いたはれたというだけで16ページも24ページも、ヘタしたら単行本10冊もつんだろうって（笑）。全然わからなくて。先も読めないんですね。あの感覚的なところに魅かれて。大島さんなんか本当にわかりません。もう感性だけじゃないですか。あと、くらくらもちふさこさんや岩館真理子さんとか、ページを開いたら、ネームがこの位置にあるということですから、もう芸術になってるんですよ。一枚の絵として完成してるっていうんですか。日本で一番進んでる文化は少女マンガだと思いますからね。

——少女マンガをアニメ化しようと思ったことはないですか？

庵野 勝てないですよ。例えばくらくらもちふさこさんの少女マンガをアニメにしようなんて無理っすよ。アニメに置き換えられるような感性を持ってる演出家っていうのはいないと思うな。くらくらもちさんと同一でもダメなんです。その上をいかないと。僕はそこまで傲慢（こつまん）にはなれな

◆日本で一番進んでる文化は少女マンガだと思います◆



◆野矢ノヒタ先生

◆やっぱりデビルマンは否定しきれないっすね◆

いと思うんです。

野火 さっきちよつとデビルマンの話が出たんですけど、私、すぐれものにハマるとすぐ「デビルマンかつー」って思うんですね(笑)「エヴァンゲリオン」の時もやっぱり思ってた(笑)何でかって言うと、シンジ君は結局お母さんが使徒になるんですよ。そうするとデビルマン(と同じ)になるわけですよ。だからシンジ君はずっと、自己について悩んでるわけなんですけど、最終的には、それが更に根底から覆されて人間であるアイデンティティも揺さぶりをかけられるのかなあと思ってたんですよ。

庵野 まあ、近いっすね。やっぱりデビルマンは否定しきれないっすね。

お母さんは使徒なんですか？

庵野 どうなんでしょう。あとで気がついたんですけど、無意識のうちにやってたんです。ウルトラマンとかデビルマンと、同じなんですよ。人間より上の生物を倒す時にやることっていつたら、相手を取り込んでしまうってことですよ。石ノ森先生も前に描いてたんですけど、「悪を倒すのに、悪の力を借りる」。まあ、使徒のコピーを作って、それに人の心を加えるってパターンです。

話は飛ぶんですけど、スタジオジブリのLDボックスに文章をお書きになったそうなんですけど、どんなことを？

庵野 結局、悪口に近いことばかりです(笑)

庵野監督は宮崎駿監督のどういう部分を批判されたんですか？ あーるいは宮崎アニメと庵野監督のアニメはどこが違うんでしょう。

庵野 基本的には一緒だと思うんです。宮さんの絵は一般性を持っちゃった。例えば、僕ももっと一般受けするアニメを作るつもりは全然ないんですよ。一般化に向かうというのは僕から見れば「サザエさん」なんですよ。宮さんもどん丸くなっちゃって、今「サザエさん」



◀「完全復刻版デビルマン」
永井豪とダイナミックプロ
〈全5巻／講談社／各450円〉

になつてゐるんですね。昔の「サザエさん」は毒があつたんですけど。

宮さんの最高傑作は「ナウシカ」の7巻ですよ。連載してる時は宮さんのところへ行くと「続きはやく見せて下さいよ」って、欄に描きかけのが入ってるから見ようとしたら、「まだ見ちゃダメだ」って（笑）。宮さんが部屋から出ていったら欄から出す（笑）。で、来月ね「（アニメーション）見なくていいやつて（笑）。もうアニメなんかやらずに、「ナウシカ」をずっと描いていてくれればいいのに、僕のために（笑）」と思つたんですね。最後のあたりはドロドロやつててよかったです。行きたびこうなつて（頭を抱える）「どうやつて終わらせたいのか、わからない」って。その気持ちは今ならよくわかります。結局、僕の「エヴァンゲリオン」も、行き着くのは「デビルマン」と「ナウシカ」の7巻ですよ。まあ、思想的な部分で同じ答えに行つちやうんでこれはしょうがないわつて。

野火 私リアルタイムで映画の「ナウシカ」を見た時に、泣いちゃつたんですね。でも7巻まで読んだ後にまた見たら、うーん、釈然としないと思つて。1、2巻までが映画になつてますけど、マンガの中ではその巻まででもすでに7巻に通じるような暗いものがあつて。でも映画にした時に、宮崎さんはそういうものを全部切っちゃつたというか。でも庵野さんは逆を行つてゐるんだなつて（笑）。庵野さんって「黒い宮崎」なのかしらつて思つて（笑）。

庵野監督の想定観客つていうのは？

庵野 それは昔も今もこれから自分自身だけです。逆に自分が面白いと思わないものは他人に見せたつて、面白いと思わないと思うんですよ。

野火 ただ、そこで聞きたいのは、自分だけ楽しいというんだつたら、日記を書いてればいいじゃないですか。でもわざわざ公開するのは、どういう意図なんでしょう。

庵野 他人との関係というか、接点がそれしかないからでしょうね。

広い自己満足という。

庵野 というか、作家つてやつぱり人に見せるものつてオナニーしかないですよ。

◆「ナウシカ」をずっと描いていてくれればいいのに、僕のために◆



◆「風の谷のナウシカ」宮崎駿
（全7巻／徳間書店／各480円）

◆自分のオナニーショーは商売になる◆

野火 その感覚ってよくわかります。やっぱり見られてないと感じないんですね（笑）

庵野 そういうものだと思います。人が見てるから余計いいという。ナルシストしか作家にならないですからね。自分自身にある程度自信があつて、それを見せるってやつです。自信のない人というのは前を隠しちやつてますから。

でも、その例でいくと、風俗では客のリクエストに応えてあげるというのもあるわけじゃないですか。お客さんのほうを直接してあげるといえるのか。

庵野 だからゲームのほうに行くわけですよ。アニメのキャラを「この人俺のこと好きにならないかな」と思っているよりは、よりアクティブに、好きだとか言ってくれるわけじゃないですが、ゲームって。それが要するに出張してシゴいてあげてるっていう（笑）

なんで自分のオナニーを見せてあげたいの？

庵野 いや、僕は自分のオナニーショーは商売になると思ったからです。それが得意技だから。

庵野 ええ。出張してやつてあげる気にはならないですね。自分でやれと思いますよ。僕はフィルムにこだわる仕事ですからね。そこまでサービスする必要はないです。そこまでいったら人間、自分で何にもしないじゃないですか。

でも人のためにしてあげてるっていう言い訳もあるじゃないですか。

庵野 人のためなんて、そんなの嘘ですよ。

俺のオナニーを真似てやつてみると？

庵野 そこはもう、関係性は人それぞれだから。それを見て自分でマスかく人も、それは良し。それを見て顔を突き出して、ひたすらかけてくれるのを待つてるのも良し（笑）。

◆ 肉食についてうかがいたんですが、肉を食べないのは主義なんですか？

庵野 いや、嫌いなだけです。普通の生活に興味がないですし、食うのにも興味がないんです。

◆セルアニメっていう方法自体が限界だと思っくんですよ◆

たんですよ。だってスタッフのおかげですから、儲かった部分はスタッフにできるだけ還元するべきでしょう。まあ、僕自身、あまり金に興味ないというのがよくわかりました。前はあまり持つてないから、興味ないと思ひ込んでるのかなあと思つてたけど（笑）。性欲は人並みくらいにはあると思います。男はないですが（笑）。

JUNEで、女の人になぜ男同士のになるかつて問題を突き詰めていくと、最終的には家族問題に行き着いちゃうところがあつて。だから「エヴァ」が家族問題をちゃんと描いていたので、女の人も見られたという。

庵野 いや、ちゃんとはやれてないですね。

でも戦闘シーンと同じくらいちゃんと。

庵野 うーん。セルアニメっていう方法論自体が限界だと思っくんですよ。記号論でしかないですよ。マンガもそうなんですけど、まだ自由があつていいと思っくんです。セルって枠線をどうしても描かなきゃいけないんですよ。結局は枠線を描いて中を塗るっていうぬり絵なんですよ。白と黒とのああいふモノトーンの美しさっていうのは、まず少女マンガには勝てないんですよ。金属も岩もセルになったらみんな同じ質感ですから。それを叩いた時にカンカンッて音がすれば金属かな、コンコンッて音がすれば、あつ岩かっっていう程度の稚拙な表現なんですよね。眉をしかめているのをパツと見たらみんな怒つてるとしか思つてくれないですよ。あとは役者に頼らざるをえないんです。だから本気で怒つてゐるのか、わざと怒つてゐるのかというの、セルの一枚絵で表現できないんですよ。そういう不自由な表現の中で、人間を描くなんて至難の技なんです。でもだからこそ、こたわらないとダメだと思っくんですよ。人間ドラマに。でも、やっぱり描ききれてると思ひません、「エヴァンゲリオン」は。人間ドラマというの、こんなに生易しいものじゃないと僕は思ひます。



▶「A.T.フィールドのこじあけのイメージとして、強忍ですから、眼をひききめる感じなんです（あそこには綱を強く握りこみ入れています）。人間の一番最初の防衛っていうのは、固まらないうつ。はたかて歩いててもいいのに、人間だけは、少くとも強固に固まらないうつ。」

◀「描表の一番最初は眼を凝らすところですよ。」

A.T.（Absolute Terror）絶対恐怖（強）って、なんか怖い感じがしていいかと。自分の中の怒りですよ。絶対に人に入つてもらいたくないところ。要するに自分のなかの一番大事なものを守るものなんです。」



「最初から『エヴァ』」まで三話が書かれますね」

庵野 最初は何やっていいかわからなかったんですよ。頭の中では「ガンダム」「ヤマト」を越えたいとかいう思いがぐるぐる回ってて、「ナディア」が終わってから、「ナディア」を越えるものが自分の中で生まれて来なかったんです。

そのうちやつと、テレビの企画が決まって。いわゆるロボットものの各話完結の話で考えてたんですよ。「マシンガーズ」をもっとリアルにやればいいやつて感じて。だんだんその程度じゃつまなくなっちゃって。それでも何やっていいかわからなくて半年以上企画書だけ。1話の脚本に半年ぐらいかかったんです。で、2話あたりからどういうものかがちよつとずつ見えてきて。

3話は全く空白のままできなくて、5、6話が先にできてしまつて、で3話に返ると「あ、だめだ、間に一本やはり入れなきゃ」ってまた4話ができてきたんです。

3話に立ち返った時に、その30分のうちにシンジとトウジ、ケンスケが仲良くなるのがおかしくなっちゃったんですよ。普通のロボットものだったら、パターンとしてその一話分の中でそのエピソードがハッピーエンドで終わらなきゃいけないですよ。その枠のなかで終わる話として考えていたんですけど、そこから進んじやうとあとがしんどくなるんですよ。キャラクターをより人間的にやらなきゃならなくなつて、テレビアニメのカテゴリーを越えてしまうので。でも、結局そこから出ざるを得なくなつて、4話を作った時に、人間をギリギリまでマジにやらなきゃいけない作品に決まっちゃったんですね。

で、7・8・9話はスタッフももう疲れてたんで、とにかく明るい話をここで入れなきゃと。重いのをやってると気も重くなるんですよ、やつぱり。スタッフがのびちやつてたから、各話完結で気が楽に進むやつを続けて。

初期はホーンに2か月、コンテに2か月、僕が直すところまでいれると4・5か月、それだけ時間かけてやってましたけど、だんだんひまもなくなつて、26話なんて三日ですから。あれが

◆「ナディア」を越えるものが自分の中で生まれて来なかった◆



▶「最初考えた時は概念的なものであったんです。使徒にはエヴァじゃないと固が立たないっていう設定を作った時に、ATフィールドというのが出てきて」
「その中でずんずんあの作ってたんだろ」とその意識を後から考えた。『あ、心の壁みたいなもんか』と。要するに、それが意識しているものは何だろって考えて、後からそこに行き着いたんです。」

精一杯ですよ。できたのは、うちのスタッフの優秀さですよ。それはすごいと思う。24話なんて3週間ですよ。摩砂雪がほとんど一人でやってたんです。3週間ひとりでやってあそこのレベルまで来るっていうのはすごいんですよ。そういうスタッフに恵まれてる。スタッフの才能のお陰です。じゃなかったらとてもとても。

野火さんが号泣したという14話なんですが、あのレイのモノローグはどんなふうになっ

庵野 14話の前半はああいうふうには総集編にしようと思ってて、後半に入った時に、レイってどういうやつだろうっていうのをずーっと忘れてたから、描けなきやと。

16話のほうが先なんですよ、脚本は。最初はシンジと使徒がファーストコンタクトで話をするとこの予定だったんですけど、できなかつたんです。

最初のイメージでは、いろんな国の言葉といろんな動物の鳴き声と雑多なノイズが画面の中を流れてて、そのなかで使徒が日本語にたどり着くという。で、ピツと合致したときに絵がパツと広がって、きみの思考言語というか考えてるパターンはこれでいいのかね、と聞いてくるところからスタートだったんですけど。

カツコイイですね。

庵野 それはそれでいいなと思ったんですけど、そこで日本語を話したらおしまいだというのがあったんです。カヲルくんというのが最初から人型で用意されてたんで、そこまで人の言葉をしゃべるのは取っておこうと。じゃあシンジが取り込まれて何するんだろうと思ったら、たぶん自分のことをじっくり考えるチャンスなんじゃないかなと。その16話の、インナースペースみたいところが最初なんですよ。あれはわりとスラスラとできたんです。

で、レイの話になった時に、詰まっただけです。全然書けなくて。レイっていうキャラクターは分裂症的にしようと思ったんですけど、書こうとした時に、思いつかなかったんですよ、何も。結局気×いを書く時には自分が気×いになるしかないんだろうなと。その時にちよつと友達と相談してですね「気×いが書いてる文章って何かないかなあ」って聞いた時に、別冊宝島

の精神病の本、あれ書いてくれたんです。イメージでリースナブルな本なんですけど」(笑)
 その中に気×いの書いたポエムが載ってて、すごく良かったんです。詩を読んで感動したのはあれが最初に近いというぐらい。鋭利なナイフの先の光みたいな感じがあつて。これは確かに常人の感覚じゃないっていう。よかつたんです。今考えればそういう素養が自分にあつたというだけの話なんですけど(笑)。気×いの文章を一級品と思うのは気×いだけという。それを読んでドワーツとイメージが広がって一気に書けたっていう。

あれ底本があるっていわれてますけど、じつはないんですよ。インスパイアされたものはありますけど全然別のものです。誰かの詩にすごく似てるって、それを真似したんじゃないかと言われてるんですけど、「ああ、じゃあその人も多分気×いなんだ」と(笑)。有名な詩らしいんですけどね。そういうのと同じだと言われるぐらいのものが書けるなんて、俺も才能あるんじゃないかと思っちゃいますよね(笑)。

放映が終わった後はいよいよひどくなつて医者に行きましたからね。マジに死ぬことまで考えましたから。空虚みたいな、存在価値が何にもない。おかげさでもなんでもなく自分のすべて賭けてたんですよ、ホントに。それが終わった後自分の中に何も無いというのがわかってしまつて。後で聞いたら「あ、それは自我崩壊だよ」って。すごく悪いLSDとかやつたときに味わう感覚らしいんですよ。「薬もなくそれができるのはすごいことだよ」と言われて、そう今だとすごく得した気分なんですけど(笑)。ホントに死にたいのかどうか確認するのに、ここ(GAINAXの建物)の屋上に登って足を出して、バランスを前に倒れるぐらいまで持つてつて、ホントに死にたいならここで死ぬはずだし、死にたくなかったら後ろに下がるだろうと、自分で確認するためにやつたんですよ。まあ死に至らなかつたからここに在るわけ。最初は躁だったんだけど、鬱がどんどんひどくなつて。会社の仕事場から出なくなつて、トイレの時だけは外に出たけど、メシもほとんど食わなくて。人に会いたくないんだけど人に会いたいというジレンマがバーツとなつて。

◆空虚みたいな、存在価値が何もない◆

「山 重い山 時間をかけて変わるもの
 空 青い空 目に見えるもの 目

に見えないもの

太陽 ひとつしかないもの

水 気持ちのいいこと 碇司令?

花 同じものがいっぱい いらな

いものもいっぱい

空 赤い、赤い空 赤い色 赤い

色は嫌い

流れる水

血 血の匂い 血を流さない女

(一)

これは誰? これは私 私是谁?

私は何? 私は何? 私は何?

私は何? 私は自分 この物体

が自分

自分を作っている形 眼に見える

私

でも私が私でない感じ とても変

(略)

—第14話、綾波レイのモノローグより。

◆わかんないのに描くっていうのは僕はだめだった◆

家に帰らないんですよ。帰る手間がめんどくさいから。だからずっとここに寝泊まりして、帰るのは年に何回かしかなくて。会社にいると、トイレに行く時にスタジオ横切るんで、人に会ってしまうので、とにかく一人で考えようと思って、自分のうちに何カ月かぶりに帰ったんです。万年床だからいつでももぐりこめば済むんで、シャツとパンツ一枚で寝転がった時に、ものすごく怖い、怖い考えとしか言いようがない、そういうのに全身が包まれる感覚があつて。それに包まれた時に、バツと飛び起きてあわてて服を着て、とにかくカバン持って、表通りに出て「タクシー！」で、会社に来て、会社の自分の部屋に来て寝る。これが自我崩壊かつて。死にたいとかそういう感覚でもないんですよ。なんとも言えない。逆にそれだけ本気で「エヴァンゲリオン」やってたんですよ。

人間てどうしてそう存在理由が必要なんでしょうねえ。不安になったり。

庵野 僕は、人間は不安なほうが自然だと思うんですよ。幸せっていうのは錯覚でしかない。「エヴァ」の次の作品というのは、何年後になるんでしょう？

庵野 アニメやるかどうかわかんないですよ。アニメが駄目だと思つたらさっさと引き上げちゃいます。今アニメで立て直していいもの作ろうと思つたら、相当エネルギー使わないと。若くて元気のいいのはゲームのほうにいつちやいます。

—そういう意味で女の人がんばってくれればいいなと思うんですけどね。

野火 やっぱり向き不向きがね。夢見る力では男の人に勝てないと思いますよ。ひとつの世界を構築して行く力が、女はちよつと。

庵野 うーん、そういうところはあると思いますが、男も女にかなわないところはあると思います。女は女にしかわからないですよ。さんさん悩んで「アスカの生理の話って結局ストリートに描けなかったんですよ。やっぱりわかんない。わかんないのに描くっていうのは僕はだめだったんですよ。シナリオのほうではもつという書いてあったけど、バツサリ切つたと思います。22話の、洗面所でおなかを押さえて「子供なんか絶対にいらぬのに」って

セリフだけで済ませて、それ以上は描けなかった。リテイクする時にもうワンシーンだけ足そうと思ってるけど。自信がないっていうかやつちやいけないと思うんですよ。月に一回必ず腹が痛くなるその痛さとか全然わかんないですからね。経験がないのに口先だけでやったって、女性に対して失礼だと思うんで。それでもアスカっていう女の子を出すのに、そこだけは入れたかったんですよ。できるぎりぎりの範囲ですよ。そこから先は絶対だめ。だから野火さんがアスカを描いた「絶対安全剃刀」に全然かなわん、って。貞本とふたりで「だめだ」って。野火 毎回遺書のような気持ちで書いてました。だからやっぱりわが身を切り売りするしかないんじゃないですか。

庵野 やっぱ「エヴァ」って男の生理でできてるなと思いますよね。できるだけ女性のほうにも近づけようとは思っても、やっぱり男から見ると女ですよ。他のアニメと違うのはあんまり都合よく作ってないってところですけど、なんか擬似的なものって気がするんですよ、本当の女じゃなくて。

野火 エヴァに乗りたーいっていう男の子がいっぱい出たでしょ。そういうのに、私、庵野さん悪意を持ってたのにな。コミケ会場で「レイちゃんはやっぱり包帯姿だよ」とか言ってる男とかの前を、私は呪詛しながら通りすぎてたんですけど（笑）、庵野さんもそうに違いないと思ってたんですけど。

庵野 うーん、いやけっこう……ああでもそれは似てますよね。俺も「死んでしまえ」ってたんです（一同笑）

要するに群がるしかない人というのは、ほんとにいるんだな。オウムのシステムが身をもつてわかったという。「あ、教祖になるのは簡単だな」と。

群れって嫌いなんです。すごく憧れる部分があるからまた嫌なんですけど。っていいながらも群れざるを得ない。一匹狼にはなれない。一匹狼になるんだったらアニメやってないですよ。

◆やっぱり「エヴァ」って男の生理でできてるなと思いますよね◆



◆フィルムもドラッグとおんなじですから◆

依存しなきゃいけないっていうのは怖いですよ。

庵野 依存心は誰にでもあると思うんですよ。程度を越えるともまずいなと思いますけどね。フィルムもドラッグとおんなじですから。どうしても耐性と精神的依存性っていうのが問題として出てくるのはしょうがないですよ。より刺激の強いほうにみんな走ってしまう。それを見ないと気がすまないという。そういうんではドラッグ的なものは多かったと思いますけどね、うち（ガイナックス）のアニメって。

僕も今、金曜日が楽しみなんですよ。「激走戦隊」カーレンジャー」と「こどちゃ」（こどものおもちゃ）なんです。「こどものおもちゃ」はビデオに録って毎回観ようっていうほどではないんです。やっぱり今一番楽しいのは「カーレンジャー」。観ればいいんですよ。この間のはちよつと保存版ですけど。

— なんだったんですか。

庵野 セルフパロディをやつて。暴走戦隊ゾクレンジャーっていう（爆笑）徹底しててよかったんですよ。わかってらっしゃるっていう。ツボを心得て、心地よいパロディでした。やっぱり本物がやると違うなあ。歌まで用意してたんです。自分のとこでないとできないですよ。ちゃんとセリフまで同じにして。黄色の奴なんて「まかせんしゃい」（笑）レッドの決めポーズもちゃんとあわせてあつて。一話が短いぶんぎゅうぎゅうに詰まってるいいですよ。この前なんてとうとう見栄が切れなかったんですよ。要するにゾクレンジャーのほうがやってしまうので、本家のほうが見得を切る暇がない（笑）。RVロボがガッシャンって出てきて、ワンショットべつなのが入ったら、次のカットではもう合体終わってますから。テンポ早くて。おもちゃを買ったりしないんですか。

庵野 買いましたよ、RVロボ。オモチャ屋で、この年で買ったら子供のプレゼントだと思うから普通包むじゃないですか、「そのままでもいいですか」だって。自分で買ったと思われちゃ

●「まかせんしゃい」…戦隊シリーズ第一作「秘密戦隊ゴレンジャー」のキメ台詞